

# 玉川教会たより

NO. 468

4月26日

▼戦後20年、当然ながら3.10からも3.26.8.15からも20年の今年、「永井隆 原爆の荒野から世界に「平和を」」が刊行された。

「読者のみなさんへ」で、著者が永井隆を知ったのは偶然であり、彼の代表的著作「長崎の鐘」を讀むまでは、全く彼の「ことを知らなかった」と述懐する。著者は片山はるひ上智大学神學部教授、永井と同じくカトリックの信者でもある。その彼女が知らなかったという種、何時の間にか、時が流れ、全世界的「反響を呼び起こした活動も著書も忘れ去られていたのだ。

▼著者は「原爆の鐘」の初版のサインをめぐって最後まで



## 原爆の荒野から世界に

▼夢中で讀んでしまいました。時々、涙がペーシが見えなくなりました。讀み終わって、「こんなすばらしい日本人のことを知らなかった」と一と本誌に「恥ずかしい」の言葉を憶えています。

▼この涙ながらの感想は、今「永井隆を讀んだ

私の思いと全く重なる。永井の生誕の地である松江の教会で12年牧会した経験上、彼の名前を知っていたし、その親戚筋に当たる人との出会いもあった。僅かだが著書にも触れた。しかし、改めて「永井隆を讀んだ感動は、著者が「長崎の鐘」について記した感じと、重なる。

▼20年の時を経て、忘れられてしまった人、風化した出来事、全く知らなかった若い人たち、戦後20年の19時、思ひ出さなければならぬことを知らなければならぬ。思ひ出さなければならぬこと。

▼1957年、日本キリスト教団出版局の「光を

かけて」シリーズの二冊であり、主役読者を中学生も含む学生、青少年に想定している。光をかかげて「読者」をかわせ、平易な言葉と親類の記された文章が、その出来事の重さを感じさせない。著者が、淡々と客観的に述べようとしていることも分かる。しかし、時に、永井の行動を伝えるその文章が、思いが、ほとぼしする。永井の強い思い入れが感じられて、それが魅力になっている。生前の永井に会ったことがないという事実は信じられないうちに、著者の「鐘」は、永井の姿が、表情が、その声までもが宿っている。

▼すれ「永井隆を手に取り、ここに描かれた人に、出来事に、初めて出会う、若い人々も、永井の姿を、心に思い描くことが出来るのではないか。

▼「この本は、今の時、是非、読まなければならぬ。若い人々の手に渡らなければならぬ。とたゞ立派な運動よりも、もっと効果的、もっと読者の心を響かせる力が、この本には、そもそも、「永井隆」にはあるべき。

▼客観的な批評を述べる書評ではなくて、また、これが、「この本」の魅力だ。

※マナナ邸の小さな文庫に置いています。是非お読み下さい。手元におくの方は、牧師までお申し付け下さい。

### 5～6月の諸集会

母の日  
5月10日(日)  
母の日は、教会から始まった、教会暦の行事です。

ペンテコステ(聖霊降臨日)  
5月24日(日) 10:30～

西東京教区総会  
5月24日(日) 15:00  
於、吉祥寺教会。

小松川教会特別伝道礼拝  
5月31日(日)  
竹澤牧師が講師として出張します。

子どもの日(花の日)  
6月14日(日) 10:30～  
OSとの合同礼拝を持ちます。  
礼拝後、ナルドの集いを予定しています。

婦人会野外例会  
6月26日(金)  
後日案内を発行します。

諸集会を覚えて、ご加禱下さい。